

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24611005

研究課題名(和文)観光まちづくりにおける学習と活動の接続に関する研究

研究課題名(英文)A Study on Connection between Study and Practice of Community Development Through Tourism

研究代表者

津々見 崇 (TSUTSUMI, Takashi)

東京工業大学・情報理工学(系)研究科・助教

研究者番号：40323828

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：観光まちづくり学習事例が増えている昨今、それと実際の観光まちづくり活動との<接続>が重要である。本研究は、観光まちづくり学習教材の内容分析、学習教材の制作経緯・活用方法の特徴の整理、過去の学習経験者が活動へと接続した内容と要因の分析を通じ、<接続プロセスモデル>を構築することを目的とし、更にエコミュージアム設立準備活動を事例として、学習と活動への展開を分析することで、<接続プロセスモデル>の検証を行った。<接続プロセスモデル>は事前準備を含む8段階に整理でき、事例から一定のモデルへの適合が示された。今後はまちづくり活動組織が行う人材育成のプロセスモデルとの比較検証が必要と考えられる。

研究成果の概要(英文)：Regarding the recent situation of community development through tourism (CDTT), the connection between the study of CDTT and its actual practice is need to be considered to get the CDTT more effective and successive in community development. This research tried to (1) analyze education contents of learning materials about CDTT published by municipalities, (2) reveal editing and using process of the material published in Amakusa area in Kumamoto, and (3) clarified motivating factor which connects learner to CDTT practice from the former case of study program in Iwatsuki in Saitama prefecture. Through the consideration of these results above, a hypothetical "connecting process model" was attempted to establish, and sorted out into eight stages from study to practice of CDTT, including pre-study stage. The hypothetical model was applied to a case that tries to establish an eco-museum in Ishikari city in Hokkaido, and examined its empirical adequacy.

研究分野：都市計画・まちづくり、まちづくり学習、観光まちづくり

キーワード：観光まちづくり まちづくり学習 副読本 エコミュージアム 市民参加 アウトリーチ

1. 研究開始当初の背景

わが国の主要政策テーマの一つとして観光が位置付けられてから10年以上が過ぎた。その間に、観光地域づくり人材育成も実施され、同時に地域にとっての観光の意義を高め、また観光者にとって地域をより理解することによる質の充実を図る取組みとして「観光まちづくり学習」が行われてきた。観光まちづくり学習は、単に観光による経済振興を理解させることを目的とした学習に留まるのではなく、「観光を通じた地域・まちづくりに向けて、観光の取組の推進に貢献する学習や、地域づくりの中で観光をいかに扱うのか」といった、新しい地域の姿を観光というフィルタを通じて考える学習であると考えられる。

「観光まちづくり学習」は、住宅や自然環境といった生活環境づくりに主眼を置いた従来の「都市計画教育」「まちづくり学習」に比べ、学習の先にある具体的なアクション、すなわち地域資源の保護やホスピタリティの醸成など、観光によるまちづくりへの具体的な参画をより意識した内容で取り組まれてきたと評価できる。しかし、それが実際の観光まちづくり活動に展開した例となると、子どもの学習と大人による観光まちづくりという一義的には異なる対象へアプローチしていることもあり、総合的に実践し、成果に繋がったものは多くない。

すなわち、観光まちづくり学習(教育)は増えているものの単発的に行われるケースが多く、それと実際の観光まちづくり活動との有機的な連続性、すなわち<接続>という観点では課題が多く残されていると考える。従って、地域の中でその両方に取り組む、かつ両者を<接続>させるという点については、実現に向けた課題を整理し、克服するための要件を検討すること、さらに検討結果を踏まえ、学習と活動を一体的に設計していく中で学習プログラムを構築していく必要があると言える。

申請者らのグループでは、新潟県の小学校社会科副読本の内容分析を行い(文献①)、まちづくりに関する学習教材・プログラムの問題点、地域協力者の不足等の問題点を指摘し、学習が実際のむらづくり活動に展開しづらい状況を明らかにした。2004年度には子ども向け教材を母親が作りながら、自らもまちへの理解を深め、まちづくりに参加するスキルを獲得していく学習プログラムを開発した(文献②)。さらに、学習者が獲得したまちづくり知を第三者に伝えていくためのメディア開発を内在化させた学習プログラムの開発(文献③)、まちづくりリーダー等へのインタビューを通じて意識や技能を向上させるプログラムの開発(文献④)等を研究してきた。

次なる課題としては、以上のような学習プログラムを学校教育や既存の観光まちづくり活動へと応用し、学校教育、社会教育・市民活動、まちづくり活動が有機的に<接続>する

ための理論の構築という段階に至っている。

2. 研究の目的

以上の背景の下、本研究では、(1)全国の観光まちづくり学習教材の内容、制作経緯、学習における使用方法是どのようなものか、(2)観光まちづくり学習から実際のまちづくり活動へ<接続>した事例ではどのように展開したか、(3)学習と活動が<接続>した地域では、どのような観光まちづくり活動が行われてきて、観光まちづくり学習はどのような時期にどのような理念で行われたのか、の3点を明らかにした上で、(4)学習と活動が有機的に<接続>するための要因及びプロセスはどのようなものかについて、実証実験も行いながら検討していくことを目的とする。

3. 研究の方法

まず観光まちづくり学習教材について内容分析を行い、①観光の原論・概念に関する記述内容、②地域資源・特性に関する記述内容、③観光振興・産業に関する記述内容、④観光とまちづくりの関係に関する記述、等の分野ごとの特徴を見る。

次に学習教材作成を行った地域から事例を選定し、資料調査及びインタビュー調査を行い、制作経緯及び活用方法について明らかにする。同様に、観光まちづくり活動の展開過程についても、資料調査等より明らかにし、教材作成との関連性を考察する。

同様に事例研究として、観光まちづくり学習イベントを試行もしくは既存の学習講座事例をレビュー及びその後についてフォローし、参加市民への意識調査を行うことで、観光まちづくり活動の動機付け及び学習との接続の要点を考察する。

以上より観光まちづくり学習と活動の<接続プロセスモデル>を構築した上で、ケーススタディとして「観光まちづくり学習」と「観光まちづくり活動(の初動)」の両方総合的に行うような実証実験を行い、モデルの有効性及び課題について検討する。

4. 研究成果

(1) 観光まちづくり学習教材の内容分析

① 学習教材の記述内容の分類

国内で観光まちづくりを主題として行政や観光協会から刊行されている学習教材(副読本)を、インターネットでの各主体のHP等を調査することで収集した。調査方法の制約から網羅的に入手することは不可能であったが、A. 都道府県単位のもの(宮城県、山形県、宮城県、沖縄県)、B. 観光地(複数市町村)単位のもの(熊本県天草地域)、の二種類があることがわかった。ここではB.を主な対象とし取り上げ、学習教材の内容を分類し、その分類にA.の内容を付加する方法で整理した。

その結果、「I. 観光原論・観光の概念」には、<a. 観光の定義><b. 人はなぜ旅をするのか><c. 観光の意義>の3つの中分類と、10の小分類

項目に分けられた。「II. 地域特性・観光資源」は、<d. 地域の感資源紹介><e. 地域の観光人気の理由><f. 資源の保護>の3つの中分類と、6つの小分類となった。「III. 観光産業・観光振興」では、<g. 観光入込・動態><h. 観光行動><i. 来訪による地域への影響><j. 観光関連業><k. 観光振興施策><l. 観光振興の成果><m. 観光職場体験・見学>の7つの中分類と10の小分類となった。「IV. 観光を通じたまちづくり」は<n. ホスピタリティ・おもてなしの心><o. 魅力のあるまちになるには><p. 観光まちづくりへの住民参加><q. 他地域の事例紹介>の中分類3項目と、11の小分類に分けられた。「V. 資料・その他」には、<r. 地図><s. 写真集><t. 統計データ><u. リンク集><v. その他>の中分類4項目が含まれる。

②学習と活動の接続に係る記述内容の特徴

上記の学習のうち、実際の地域での社会生活において実践されたり、何らかの地域活動・まちづくり活動に接続することに言及している項目としては、<c. 観光の意義>の小分類である「地域にとっての意義」、<n. ホスピタリティ・おもてなしの心>の「今できることから始める」「地域づくりの主役は地域に暮らす一人ひとり」、<o. 魅力のあるまちになるには>の「観光客へのコミュニケーション力」「地域への愛着」「地域の魅力を知り、自身を持つ」「地域の魅力を発見し、大切にすること」「地域の自然環境を保全する」、<p. 観光まちづくりへの住民参加>であった。加えて、将来的な職業選択に関する<j. 観光関連業>の「すそ野の広い観光産業」も、子どもが観光に関わる可能性を引き出す項目であるといえる。

上記の中分類の記述を通じ、(ア)観光の地域にとっての意義を訴え、地域の再発見や地域づくりの行動へのきっかけとなりうること、地域経済の活性化に役立つことを示した上で、(イ)子どもでも取り組み可能な、おもてなしの心を持った観光客とのコミュニケーション・接遇を勧め、(ウ)併せて観光資源となる地域の宝・魅力を発見・理解・保全することを促し、(エ)観光まちづくり活動に参加している住民の姿を紹介することで、将来的な活動への参加への誘いとする、もしくは(オ)職業選択可能性として観光産業を示す、といった流れが、教材における「学習と活動の接続」のパターンであるとまとめることができる。

(2)学習教材の制作経緯及び使用方法

(1)で取り上げた熊本県天草地域を事例とし、学習教材「もっと知ろう！自慢しよう！みんなの町 伝えよう！宝島・天草」(2009年3月発行)の制作経緯および使用方法についてインタビュー調査を行った。

①天草副読本の制作経緯

天草の副読本の制作経緯について、当時の担当者へのインタビュー調査を実施した(2013年9月)。

2011年の九州新幹線全線開業に先立ち、熊本県では「ようこそくまもと観光立県推進計画」(2008～2011年度)を実施していた。天草

地域振興局総務振興課では、局内予算を活用し、域内の子どもたちにも地域の宝を知ってもらい、光として示すことができるようになってほしいとの意図から、観光副読本を制作した。デザインは外部業者に委託しているが、内容は担当者3名で議論を重ね、執筆を行っている。県単位ではなく、また市町村単位でもない圏域を単位として副読本を制作した理由としては、地域外からは二市一町の範囲が観光地・天草として認識されていること、また県単位では身近な地域の取り扱いが薄くなり、学習する子どもにとって抽象的な内容となり、興味を惹くのが難しいという点が考慮されたことによる。

副読本の内容は、前半に観光の定義や意義、後半に地域にとっての観光産業の重要性や自分たちでできる取り組みを掲載し、巻末に域内資源紹介や白地図を収録、本文は16ページである。前半の定義や意義に関しては、観光を単なる遊興ではなく、地域の再発見と誇りの醸成を誘うものであり、地域振興に資することをメッセージとして伝えるために冒頭に記載したものとなっている。また、観光客に対する気配り・おもてなしの気持ちを持つことを促し、「自分たちでできる取り組み」では、観光客との挨拶や会話、地域の清掃を取り上げた。これは現状として地域の大人がしていないことを子どもに促すのではなく、日常の行動の延長線上に位置づけうる行為を説明することを意図したとしている。副読本では写真やイラストを多用し、また学習のポイントを明示するなど、分かりやすく、子どもがページをめくりたくなる工夫がなされている。

活用に関しては、5千部を印刷し、域内の小学4～6年生全員に2010年度に配布した(希望学級には翌年度にも配布)。発行後、担当者が校長会議へ二度参加し、趣旨説明と活用の要請を行っている。しかし制作費用の予算化が単年度に留まったため、教材を生かした学習プログラムの構築や、校外学習・体験学習等への展開は振興局や県教育事務所から構築されるには至っていない。調査を実施したのは発行の3年後であるが、地域内の教育委員会を通じて副読本の活用事例を照会したが、事例は皆無であった。唯一上天草市のA小学校において、2013年度に総合学習の中での活用が検討されたが、実際には一部での資料としての利用にとどまっている。

②一般向け観光まちづくり関連冊子の刊行

一方で、天草地域においては『おもてなしの観光 上天草市』(上天草観光ガイドの会、2008年3月)、『「なぜ？」に答える天草キリシタン史ハンディガイド』(天草地域振興局、2009年3月)、『天草まち歩きガイド本』(天草市地域振興課、2011年3月)など、観光受け入れ活動に資する一般向けの冊子が多数発行されている。しかし上記の小学生天草副読本の学習において、こうした現場で観光まちづくりに取り組む市民との接点があるような学習も見られなかった。

③まとめ

以上より、地域学習は市町村合併等を契機に盛んに行われ、それに伴って制作された教材が天草地域に多数存在すること、子ども向けの教材は予算の性質上単年度の取組みに偏り、地域の観光まちづくり活動との連携・地域教材アーカイブとしての位置付けが弱く、継続的な学習を通じた地域住民の人材蓄積という面では課題が多いこと、学校での教育も観光振興政策の一環として取り組まれている観光まちづくりへの住民の参画を促す取組みとの接点が殆どないこと等が明らかとなった。

副読本のようなメディアは、地域資源にまつわる情報や保全等に関するメッセージをまとめて伝えるのに適しており、文章力やデザインセンスによって学習者の興味を惹きつける可能性がある。また、まちづくり学習に取り組む際の最も簡便なツールともなりうる。しかし「学習の次のアクションの受け皿」を事前に想定し、例えば振興局等によって企画される、校外での観光まちづくりに関連する体験学習やワークショップ等へ繋がるような教材の設計が必要なのではないかと考えられる。これは直接的に子どもにボランティアガイドを体験させるような取組みに限らず、歴史を知る学習、自然保護活動、まち歩き参加などの継続的な学習・体験も含めて考えることができるものであると言える。

(3) 既存のまちづくり学習事例に見る学習の事後展開と活動への接続に関する特徴

次に、過去に実施されたまちづくり講座の事例から、講座終了後に参加者が学習成果を活動へどのように接続しているのかをみた。対象は、2005年に行われた、埼玉県旧岩槻市における「初心者対象 まちづくり最初の一步ミニ講座」の受講経験者の市民5名である。

この講座では、まちづくり活動に参画したことのない成人女性を対象に、生活者の目線から地域の良いところを探検・調査し、レポートを作成しながら情報の整理について学び、最終的に子どもを対象とした、まちに関する小冊子を作成するという内容であり(文献⑤及び⑥)、参加した女性が次世代の地域を担う子どもたちに地域の魅力をさまざまな方法で知ることができるようガイダンスするような小冊子『人形のまちいわつき 親子でまちを学ぼうハンドブック(岩槻編)』の取材・執筆・編集を行い、講座終了後に印刷・配布を実施した。なおこの講座は「観光まちづくり」を当初から企図したものではないが、親子で市内を巡りながら学習する想定で小冊子が編集され、また地域資源の発掘・活用について検討を行ったこと、さらに人形という地域資源がその後観光資源化していることを鑑みると、観光まちづくりの前段にある学習と捉えることが可能と解釈した。

上記5名の被験者を対象に、まずは1名について2013~14年度にプレ調査としてインタビューを実施した後、本調査として2015年7月に半構造化面接法によるグループインタ

ビューを実施、i. 講座受講後の地域での活動内容、ii. 講座での学習内容・成果の活用状況、iii. 現在及び今後の地域活動についての考え、の三点について聞き取りを行った。

① 講座受講後の地域での活動内容の特徴

講座経験者の受講後の地域における活動を聞き取ったところ、a. 情報紙記事の取材執筆や編集、地域情報発信 HP の立ち上げ、b. 子育て・食育サークルの立ち上げや世話役、c. 雑めぐりイベントでのスタッフ・世話役、d. まちを知る活動、e. 自治会やPTA等の地縁コミュニティ活動、の5つに大分できた。

その意味を分析すると、講座内の学習においてフィールドワークを行い、レポートや記事として文章にまとめる作業を行ったことと関連する活動、母親世代であり身近なトピックである子育て支援関連の活動、地域の代表的資源に関するイベントへの参画等、講座の学習内容・成果と大きく乖離しない、まちづくり初心者に取り組むまちづくり活動として適当なレベルのものが選択される傾向がうかがえた。その一方で、イベントの市民ボランティアスタッフの一員として参画した後、実行委員会の副委員長として他の市民ボランティアスタッフの世話役を引き受けるようにスキルアップした事例も見られた。

② 講座での学習内容・成果の活用状況

講座で取り組んだ学習内容や身につけた成果がその後の地域活動へどのように結びついたり影響したかという点に関しては、上記とも関連するが、講座においてとにかく調べて文章にまとめることを経験したことが、活動に結びついたという声が5人中3人から聞かれた。「分からないことでも動きながら調べたり考えるマインドが大事」という声も聞かれ、新たなまちづくり活動の入り口で逡巡するのではなく、関心があることに対し少し動いてみることの重要性が指摘されているといえる。

その他、「講座を通じて他の受講生の考えに触れ、同じ町の事物に対しても多様な意見があることを実感したことが、その後の活動の中でのコミュニケーションを円滑にすることに役立った」「講座で多様な受講生と知り合ったことで、その後のまちづくり活動において相談・協力を依頼するような地域内のネットワークの礎ができた」という声も聞かれた。

③ まとめ

以上を通観すると、当初のまちづくり学習講座が座学型ではなく、実践型であったことによって、その後の活動の演習として機能したと考えられる。取材・調査・文章化・発信の作業を通じた地域の資源・課題の整理、まちづくり活動における協働や支援を円滑化するコミュニケーション、サークルやイベントを利用者のニーズに合わせて、かつ自らの興味や強み(知識・能力)を活かしながら運営していくことといった、受講生から見られる活動の特徴を鑑みると、活動に接続する学習の要件にこうした事項が含まれるとまとめることができる。5名の講座経験者は講座受講前に

はほとんど地域活動を経験したことのない女性達であり、特に確定したまちづくり活動のテーマを持って講座に参加した訳ではなかった。しかし演習的な学習経験、地域を知る学習を行い、様々な地域の人たちの存在に気付いたことが基盤となって、少しずつ活動を展開させ、現在では他者の支援、他者へのまちの情報発信、まちづくり活動の企画立案・運営というレベルに徐々に達していった。

(4) 学習と活動の接続プロセスモデルの構築

以上の調査分析より、まちづくり活動へと接続する観光まちづくり学習の段階を仮説的に整理すると、以下のようになる。

①学習事前準備として、自由作文やインタビュー、質問紙回答等を通じて観光まちづくりに対する学習者の問題意識の整理を行う

①観光交流の地域にとっての意義について理解し、地域で取り組みうる観光まちづくり活動について学び、考える。既に地域で活動を行っている団体や、他地域の先進事例をケーススタディし、理念や活動内容を追体験し、自らの活動のイメージを形成し始める。

②地域資源についてフィールドワークを含めた調査を行い、地域の魅力・特性の内容や価値について学習する。

③利用者のニーズを考え、学習した地域資源の情報を冊子やHP、案内看板、ガイドコンテンツ等にメディア化し、発信する学習を行う。

④上記②③のプロセスにおいては、議論や共同作業など、学習者間での意見の交換がなされる方法を用い、演習を通じてコミュニケーション能力を高めるよう配慮する。

⑤作成したメディア等の活用を検討するワークショップ形式の学習を行い、実践的な活用方法をデザインする。その際、自らの興味や強み(知識・能力)を活かすこと、また利用者のニーズを勘案することが必要。

⑥〔ここから活動段階〕⑤までで作成したコンテンツを用いて、実際に活動の初歩段階に取りかかる。学習段階における講師や専門機関などの助言、地域住民の反応などと照会し、活動を展開できるよう少しずつ修正する。

⑦活動の展開に応じて、活動に必要な事項の学習を再度行う。

(5) エコミュージアム設立活動にみる接続プロセスモデルの有効性の検証

前述の接続プロセスモデルの仮説を元に、新たに地域資源の学習と活用の検討を開始した地域事例を対象に、実証実験的に参与観察調査を行った。対象は北海道石狩市で、市立のいしかり砂丘の風資料館の学芸員の提唱により、市民有志が集い、エコミュージアムの設立を模索している地域であり、活動はグループ「プロジェクトM」。として行っている。調査はグループ立ち上げ直後の2013年12月より2015年10月まで実施した。グループが毎月開催しているワークショップへ参加し、接続プロセスモデルに基づいて、各活動段階において活動の可能性(種類)を提示、参加市民メンバーが合議によって活動を決定し、展

開していく過程、また議論の内容についてデータ化した。また参加市民メンバーへ個人インタビューを実施し、地域での活動経験や参加動機、活動への期待について聴取した。

① 活動の展開過程

2013年度は、地域資源を巡検する活動、他所の博物館紹介発表、エコミュージアムマップを作成する活動等が行われた。2014年度は作成したマップの展示会、先進地域(三笠ジオパーク)の視察、子ども向けスタディツアーの実施、地域の古老への聞き取り調査、社家の見学をする漁村集落へのスタディツアー等が行われ、またツアーの成果を元に、教材(上記漁村集落に関するパンフレット)作成等、学習成果のアウトリーチ活動が多数行われた。また併せて、学習をかねて地域遺産を発掘し、その解説文を執筆していく学習活動が始まった(発表論文①参照)。年度末にはシンポジウムを開催し、地域内外の参加者で議論が交わされた。2015年度はパンフレットのリリース、歴史を巡るスタディツアーの開催、先進地域(北広島エコミュージアム)への視察を行い、地域遺産の学習・解説活動が引き続き取り組まれた。

市民メンバーの主たる参加動機はまず「地域のことを知りたい」ということであり、併せて「他の市民にも地域の様々な資源・遺産を知ってほしい」ということもある。中には「まちづくりに結び付けたい」という声も聞かれた。従って、地域の歴史文化資源・自然資源についての調べ学習や現地視察には大変意欲が高い。つまり、観光まちづくりそのものではないが、その第一歩としての地域についての学習に関しては、高いレベルにある。

一方でアウトリーチ活動に関しては、既に自然保護団体等でツアーや学習イベント、広報イベントを経験しているメンバーも少なくないこともあり、エコミュージアムとして市民にアピールしていく活動に対する動機付けは学習と比較するとやや弱くなっている。一つには、エコミュージアムの概念が柔軟、つまり曖昧・多様であり、何の活動をすれば設立したことになるのかという目標設定が難しいこと、市の事業や予算といった裏づけがまだ乏しく、活動可能性が限定的であったこと等が理由として考えられる。

② 考察

以上の調査結果から「学習と活動の接続へ至る要点」を考察すると、まずメンバー個人にとっての活動参加の意義・目的を整理し、活動内容の検討を通じたグループとしての共有が必要であり、接続プロセスモデルの①の重要性が確認された。石狩の事例では、メンバーの地域資源に対する知的好奇心の充足が基盤となり、メンバー自身がエコミュージアム的に地域を楽しんで学ぶことが活動の第一として位置づけられることが肝要であった。市にとっての地域の活性化に資するエコミュージアム設立の重要性はもちろん存在するものの、それを市民の手で担うためには、それ

に先立つ形で参加メンバーの根本的な欲求に答える必要があると考えられる。

二つ目には、とはいえ、学習という内省的動機に基づいた活動を取り入れながらも、それに対する満足感や充足感を地域に還元する、地域貢献的視点を後発的に導入する活動の設計の重要性が挙げられる。プロセスモデルの①③⑤に関連するが、これは学芸員や専門家によるインストラクションが必要となってくるが、学びの成果を他の市民や地域外へ発信する活動の設定に工夫が必要である。今回の事例では学芸員の助けも借りながら、市民を募ったスタディツアーや個人で資源を巡るための教材制作といった形で、得た知識や楽しみの発信がなされた(プロセスモデル③)。市民メンバーが持ち合わせているスキルとも関連するが、それを生かした還元・アウトリーチのあり方の検討が大切であると言える。今回の事例では編集経験者やツアー主催経験者、記録写真スキルを持つメンバー、また受付案内ボランティアの経験者等があり、それらのスキルの組み合わせでアウトリーチ活動が成立していた(プロセスモデル⑤)に関連。また活動を積み重ねることでそうしたスキルをシェアすることにも繋がっていき、活動可能性が広がっていると評価することができる。

そして活動へと接続する際に、前述の通り資金的裏づけや組織化など、活動の基盤づくりが望ましく、それには既往研究等でもよく言われるように行政や専門家の支援が望ましいと考えられる(プロセスモデル⑥)。

プロセスモデルの改善に関する課題については、[学習から活動へと接続]することを可能とする観光まちづくり学習を実施することは上記を用いてある程度可能と考えられるが、実際の活動を行う際の組織化にはグループ形成が可能な活動者の集団が必要となる点である。上記プロセスでは活動の仲間を集める方法や組織化については言及しておらず、また別の形で支援が必要となる。実際には専攻関連団体や中間支援団体等の実践の中での助言・協力が行われることが多いと思われるが、この段階についても今後研究を進め、手法の体系化等の試行が必要となるだろう。

また、観光まちづくりに係る活動を行っている組織が行っている学習(教育)について、本研究でレビューしたプロセスと逆の順序で調査研究を行い、両者の結果を総合的に考察することも重要と考えられる。

<引用文献>

- ①農村部の小学校における「むら」及び「むらづくり」に関する学習内容の現状分析-新潟県農村部のケーススタディ-、津々見崇・田平優友・十代田朗、都市計画論文集、Vol.37、pp.427-432、2002年
- ②大西律子・津々見崇ほか(研究分担者)、女性のための「まちづくり学習プログラム」の開発とその手法に関する実証的研究-まちづくりへの実質的な男女共同参画を促進する第一歩として-、(財)埼玉県男女共同参画推進センター共同研究、2004年

③メディア開発を用いたまちづくり学習の実践と課題-さいたま市岩槻区における親子のためのまち理解副読本開発プログラムの運用過程を対象に-、大西律子、財団法人住宅総合研究財団住教育委員会、「住まい・まち学習」実践報告・論文集、Vol.9、pp.107-112、2008。

④まちづくりの現場での問題解決を前提とした「まちづくり学習」の設計と運用-インタビュー実習工程を導入した講座の提案-、大西律子、富澤浩樹、地域活性研究、Vol.2、pp.3-16、2011。

⑤まちづくり学習プログラムの開発とその手法に関する実証的研究-まちづくりへの男女共同参画を促進する第一歩として-、研究代表者：大西律子、埼玉県男女共同参画推進センター平成16年度共同研究報告書、pp.50-101、2005。

⑥観光まちづくりにおける“まち理解副読本”の開発プロセスに関する研究-さいたま市岩槻区の事例-、富沢浩樹・大西律子、日本観光研究学会第20回全国大会学術論文集、pp.41-44、2005。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

- ①津々見崇・伊井義人・志賀健司(2015)、石狩市におけるエコミュージアム構想の胎動-プロジェクトMの取り組み-、いしかり砂丘の風資料館紀要、vol. 5、pp. 31-46、査読無
- ②津々見崇(2016)、観光まちづくり学習：現代的意義の再考と課題の検討、観光研究、27(2)、pp. 28-33、査読無

[学会発表](計0件)

[図書](計0件)

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津々見 崇 (Takashi TSUTSUMI)
東京工業大学・情報理工学研究科・助教
研究者番号：40323828

(2) 研究分担者

十代田 朗 (Akira SOSHIRODA)
東京工業大学・情報理工学研究科・准教授
研究者番号：70226710
大西 律子 (Ritsuko ONISHI)
目白大学・社会学部・教授
研究者番号：50337630

(3) 連携研究者

佐野 浩祥 (Hiroyoshi SANO)
金沢星陵大学・経済学部・講師
研究者番号：50449310